# 3. 社会貢献活動の事例 — 功労者表彰受賞者の活動事例から抜粋 —

# 3.1 代表的な活動事例

ここでは、令和元年度に顕彰した活動事例のうち、代表的なものとして「建設業社 会貢献活動推進月間中央行事」で事例発表された次の3事例を紹介します。

No.	都道府県	協会・支部・企業名等	活動内容
A1-02	岡山県	岡山県建設業協会西大寺支 部・吉備支部	平成 30 年 7 月豪雨における災害復旧支援活動
A6-03	岐阜県	(一社)岐阜土木工業会・ (一社)美濃建設業協会・ (一社)可茂建設業協会・ (一社)多治見建設業協会・ (一社)恵那建設業協会	岐阜県内で確認された豚コレラに係る防疫 活動
B6-03	千葉県	土佐工業(株)	フリーペーパー「けんせつ姫」発行によるイ メージアップ活動

# (1) 平成30年7月豪雨における災害復旧支援活動(岡山県建設業協会西大寺支部・吉備支部)

事例 A1-02: 岡山県

# 平成30年7月豪雨における災害復旧支援活動(岡山県建設業協会西大寺支部・吉備支部)

平成30年7月6日、西日本を襲った集中豪雨により、岡山県内では各地で河川が氾濫し、 甚大な被害が発生した。岡山県建設業協会では、県との「大規模災害時における応急対策 業務に関する協定」に基づき、各支部が機動力を発揮して、災害復旧を支援した。

# ■岡山市での災害復旧支援(西大寺支部)

岡山市では、7月7日早朝、東区を流れる砂川の左岸が120mにわたり決壊し、国道250 号沿いを中心に、広い範囲で冠水、床上浸水が相次いだ。

管内の西大寺支部では、県及び岡山市との災害協定に基づき、直ちに会員各社が緊急出動し、砂川堤防の応急復旧、大型土のう設置、盛土、農道復旧、市道崩土撤去、土砂撤去、流木撤去等の作業に取り組んだ。昼夜を問わず続いた応急復旧作業は約2ヶ月半に及び、出動延べ数は企業565社、作業員1,488人、重機・ダンプ1,771台に上った。



国道 250 号の冠水 (岡山市 HP より)



砂川堤防の応急復旧

## ■倉敷市真備町での災害復旧支援(吉備支部)

岡山県西部では、7月6日深夜、倉敷市真備町を流れる小田川とその支流高馬川が、合流 先の高梁川からの「バックウォーター現象」で決壊した。その後、末政川、真谷川と次々 と決壊し、浸水域1,200ha、浸水家屋4,100戸、最大浸水深5mの大規模な災害となった。

7月7日、管内の吉備支部の会員企業は、事務所が浸水して車両、重機、電話、FAXが使えない中、人命救助を優先して、近隣住民約 100 人をボートで救出した。その後、真備地区の被害状況の確認を試みたが、冠水のため近寄ることはできなかった。

7月8日、水位の低下を受けて、岡山県備中県民局の要請で、被災現場を確認し、道路 啓開(道路上の障害物を除去して救援ルート を確保する作業)等の作業を開始した。

7月9日、備中県民局の正式要請を受けて、 堤防の復旧に向けた指令本部を支部内に設 置したが、停電が続き、携帯電話も繋がり難 い中、対策会議は深夜にまで及んだ。

決壊箇所への進入路については、避難所から地権者を探し出して、使用許可を得ることができた。しかし、会員企業の中には、すでに国土交通省や総社市などの要請で出動している企業もあり、また、機材等が水没した企業が多く、重機等の手配は困難を極めた。

何とか対応可能な5社を確保し、決壊現場の土砂撤去、大型土のうの製作・設置等に、24時間体制で一致団結して取り組んだ結果、7月15日に高馬川、20日に真谷川、8月4日に末政川で破断堤防の仮復旧が完了した。出動延べ数は、企業93社、作業員3,500人、重機・ダンプ2,100台に上った。



末政川の復旧作業



倉敷市真備町の浸水



吉備支部会員による救出



末政川仮復旧の完了

#### ■今後の対応

近年、異常気象による大規模災害が各地で多発している。同協会では、建設業として、 こうした状況にどう対応すべきかを見直し、災害時の緊急対応はもとより、今後は、平時 における地域社会の安全・安心に向けた取組みにも力を入れたいと考えている。

- (2) 岐阜県内で確認された豚コレラに係る防疫活動 ((一社)岐阜土木工業会・
  - (一社)美濃建設業協会·(一社)可茂建設業協会·(一社)多治見建設業協会·
  - (一社)恵那建設業協会)

事例 A6-03:岐阜県

岐阜県内で確認された豚コレラに係る防疫活動 ((一社)岐阜土木工業会・(一社)美濃建設 業協会・(一社)可茂建設業協会・(一社)多治見建設業協会・(一社)恵那建設業協会)

平成30年9月8日、岐阜市の養豚場で家畜伝染病と疑われる状況が発生し、翌9日早朝、国内では26年ぶりの豚コレラ感染であることが確認された。その後、感染被害は県南部をはじめ近県にも拡大し、平成31年9月現在、未だ終息は見えていない。

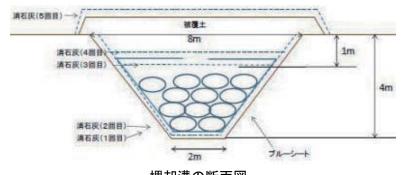
岐阜市の岐阜土木工業会をはじめ、県南部の美濃、可茂、多治見、恵那の建設業協会は、 平成29年に県の各農林事務所と締結した「高病原性鳥インフルエンザに関する埋却作業に 関する協定」に準じて、24時間体制で処分豚の埋却等の防疫活動に取り組んだ。

# ■豚コレラと防疫対応

豚コレラは、強い感染力を持つウィルスによる豚・イノシシの家畜伝染病で、感染が確認されれば、養豚場内の全ての豚を殺処分して埋却しなければならない。

本来この措置は事業者責任で行うが、実際は県が代行することが多く、県の機動力が不足する部分を、建設業者等が補う形で進められる。具体的には、養豚場での消毒、豚の殺処分(獣医師資格が必要)、処分豚や汚染物等の袋詰めと集積所への運搬までを県が行い、集積所から埋却地への運搬、埋却溝の掘削、処分豚等の埋却溝への投入、おが粉・消石灰の散布、埋め戻しなどが建設業者の役割となる。

埋却溝の大きさは、概ね底辺幅 2m、深さ 4m程度で、埋却物全体がブルーシートで囲まれるように投入作業を行うが、シートの内外には、消毒のため消石灰の散布が必要である。



埋却溝の断面図



埋却作業用防護服

# ■岐阜土木工業会の防疫活動

最初に豚コレラ感染が発生した岐阜市を管内とする岐阜土木工業会では、従来から組織 していた緊急防災隊が中心となって、防疫活動を展開した。

# ①第1例目への対応

9月8日朝、岐阜農林事務所から緊急防災隊情報管理部長に、家畜感染症の疑いに関する第一報が入り、該当エリアの岐阜中中隊が現地確認等を行ったが、病名が確定するまで待機することになった。翌9日早朝、同事務所からの豚コレラ対応の出動要請を受けて、岐阜中中隊が岐阜市防災センターに集合し、防護態勢を整えて現地へ向かった。

現地到着後、埋却地となる養豚場の隣地で、埋却作業に支障となる樹木の伐採、目隠しフェンスの設置等を行い、夕方から埋却溝2本(長さ15m)の掘削を開始した。

埋却作業には、バックホー3台、照明6基、仮設トイレ9基が投入され、3交代制で延べ103人が従事して、処分豚と堆肥、餌など400袋の埋却を、待機から56時間で完了した。 ②第8例目への対応

令和元年 6 月、山県市内において処分豚 7,400 頭の埋却作業を行った際は、発生した農場付近で埋却地を確保できず、12km 離れた場所まで運搬することになった。10 t ダンプでピストン輸送を行ったが、公道での運搬となるため、朝晩 2 回、散水車で消毒・清掃作業を実施した。処分豚と堆肥、餌など 2,765 袋の大量埋却には、ダンプ 7 台、バックホー7 台、散水車 1 台、照明 10 基、仮設トイレ 12 基が投入され、2 交代制延べ 266 人が連続 130 時間の過酷な作業に従事した。



埋却溝の掘削



消石灰散布とシート敷き



処分豚等の投入



埋戻しと消石灰散布

#### ■その他の地区の状況

岐阜市内で発生した豚コレラの感染は、美濃、可茂、多治見、恵那、中津川と東へ、また西の揖斐郡へと広がった。イノシシを介して山伝いに伝染したと推測されている。

平成31年9月現在、県内で豚コレラが確認された養豚場は25ヶ所に上り、県内飼育豚の半数を超える約7万頭が殺処分された。

各地区の建設業協会は、発生のたびに、それぞれの機動力を最大限発揮し、全ての埋却作業を引き受けている。平成31年9月30日現在の各地区の処分頭数は次の通り。

岐阜地区: 17,766 頭、美濃地区: 9,276 頭、揖斐地区: 3,610 頭、可茂地区: 1,580 頭、 多治見地区: 5,765 頭、恵那地区: 31,834 頭 (以上、合計 69,831 頭)

埋却作業は、慣れない防護服で身を包み、殺処分される家畜の鳴き声の中で行う精神的 苦痛を伴う作業である。各地区の建設業協会は、こうした作業も、災害に対する建設業の 社会的使命の一つと考え、早期終息を願いつつ、今後も対応していくとしている。

# (3) フリーペーパー「けんせつ姫」発行によるイメージアップ活動(土佐工業(株))

事例 B6-03: 千葉県

# フリーペーパー「けんせつ姫」発行によるイメージアップ活動 (土佐工業(株))

土佐工業(株)は、女性に向けて建設業の魅力を発信しようと、平成30年より、建設現場で活躍する女性を紹介するフリーペーパー「けんせつ姫」を発行している。

21 歳で同社を創業した社長は、女性技能者としての経験から、建設業=男性の業界イメージを払拭して、男女の隔てなくお互いを尊重し合える業界とすることで、女性の入職を促進し、結果として、担い手不足を解消したいとの思いで、平成25年より、独自の「けんせつ姫」活動を開始した。

#### ■第1弾:女性作業着の製作

同社創業当時、女性用の作業着はなく、上着は男性サイズのM、パンツもウエスト 70cm のものを着用していたが、ポケットも、女性は男性とは違う使い方なので、女性ならでは の機能性を備えた作業着が欲しいと考えた。そこで、生理用品、口紅、手鏡をしまえ、下向きや背伸び作業でも、気にせず集中できるような作業着を、自ら製作することにした。

しかし、いざ製作となると、アパレル分野は難しく、何度も挫折しそうになりながら、 約4年後に何とか形ができた。ただし、大量生産ではないのでコストも高く、宣伝もしな かったので、浸透は薄く、これでは業界アピールには役立たないとの結論に至った。

## ■第2弾:フリーペーパー「けんせつ姫」の発行

次に考えたのは、建設現場の女性技術者、技能者の実像を紹介することである。

未来を担う女の子たちは、危険作業と隣り合わせで、全身ホコリにまみれながら真剣に働く先輩の姿を見て、建設業をより身近に感じ、自分もそこで働きたいと思うのではないかと考えた。そこで、建設現場で働く女性たちに光を当てたフリーペーパー「けんせつ姫」の発行を企画した。

フリーペーパー「けんせつ姫」の制作は、 社長が編集長となり、本業の傍ら、有志とと もに姫探し、取材アポ取り、現場取材に奔走 し、執筆、校正までを行った。

この第2弾は、多くの新聞で紹介されるなど予想以上の反響で、記者からは、貴重なアドバイスも得られた。また、日本経済新聞の記事がきっかけで、法務省コレワーク(矯正就労支援情報センター)から女子の矯正教育への支援依頼があり、近県の学園を視察し、令和元年11月には、都内の学園で姫たち数人と社長が講話を予定している。

千葉県労働局や県協会本部からも声が掛かり、平成30年8月3日の「建設業における女性活躍推進シンポジウム」では、社長が登壇して事例発表及びパネリストを務めた。

同年 12 月、日本タウン誌・フリーペーパー大賞の企業誌部門では最優秀賞を獲得し、令和元年 5 月には、千葉テレビで一連の「けんせつ姫」活動が紹介され、話題となった。





「けんせつ姫」創刊号(2018年2月)



「けんせつ姫」第2号(2019年2月)

## ■第3弾:座談会の開催と情報発信

第2弾に引き続き、第3弾として「けんせつ姫」による座談会の開催を企画し、平成30年4月に第1回、平成31年4月に2回目の座談会を開催した。

これは、「けんせつ姫」たちの交流を兼ねて、現場に携わる者同士の意見を交換する会で、女子会モードで参加した姫たちも、「また明日から頑張ります。」と笑顔で別れていった。座談会で交流したメンバーとのグループラインは、会を重ねるごとに増えており、色々な情報を発信しながら、時にはお悩み相談会にもなっている。

座談会には、中小企業ならではの声、作業 者側の声をすくいあげようと、国土交通省や 千葉県建設業協会からも見学者が訪れた。

また、当日はフジテレビの番組「めざましテレビ」の「キラビト」の取材が入り(7月9日に放送)、姫たちも、周囲から大きな反響があったことで、建設業を盛り立てる意欲が増した様子であった。



フジテレビ「めざましテレビ」での紹介

#### ■今後の展開

全国的に見ても、女性技術者、特に技能者の数は非常に少ないのが現状である。だからこそ、「けんせつ姫」を発掘して紹介し、交流を促していくことの意義は大きい。令和2年発行予定の第3号は、現在、取材の最中であるが、全国版とすることを考えており、今後は全国レベルで「けんせつ姫」のモデル候補を発掘していきたいとしている。

また同社は、建設業志望の女性のための採用サイト「建設ジョブ.net with けんせつ姫」を11月に公開するので、女性を採用したい企業に多数参加してもらいたいとしている。

このサイトでは、応募者が希望する仕事を探しやすい業界初の仕掛けを施すことを予定している。



「けんせつ姫」たち



窓口を飾る「けんせつ姫」

社長曰く、「「けんせつ姫」に関わる人々、関わった人々とともに、建設業=3K・男の業界というイメージを払拭したい。女性もできる仕事イコール男性もできる。男性と女性が良い所を伸ばし合い、建設業の魅力を発信することで、担い手確保に貢献できたら良い。数年先には団塊の世代が引退してしまう。技術継承を考えると時間はない。」